

道博協ニュース

発行所 北海道博物館協会
 事務局 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
 北海道開拓記念館内
 電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

平成16年度ミュージアム・ マネージメント研修会から

道南ブロック博物館施設等連絡協議会の主催で、「地域の学習施設としての博物館と地域の教育者である学芸員」というテーマのもと、10月7日・8日の両日今金町で開催し、全道から46名が参加した。

テーマの設定について

従来このような博物館経営のための研修会では、集客方法を含めた館の運営について勉強するために、大規模な博物館の館長や学芸員、あるいは民間のテーマパーク的な施設で活躍している責任者を招いて話を聞く研修会の場合が多く、勉強にはなるが規模が違いすぎて参考にはならないくらいがあった。

道南ブロック博物館施設等連絡協議会に所属している施設にかぎっても大半は学芸員が1人か2人である。また、施設ではなく教育委員会に配属されていたり、あるいは学芸員としての本来の仕事よりも埋蔵文化財担当の専門職員としての配置のように見受けられるのが実情である。

そのため、身の丈にあった博物館経営の研修会があっても良いのではないかと考えるにいたった。我々の努力不足もあるが、館・園を利用する側も博物館の役割ということについていまだ理解していない面がある。また、学芸員という職業も図書館司書に比べるとまだまだ認知不足で、せいぜい良くて発掘調査に従事する人という情報だけが広まっているというのが実態である。

そのような現状にあるなか、昨今の地方分権推進にともなう行財政改革の負の部分としての予算の削減が毎年のように続いており、大げさに言えば風前の灯火的な存在なのが、民間を含めて地方のそして中小の博物館施設である。そのようなことに留意しつつ道南ブロック博物館施設等連絡協議会の皆さんと協議した結果、集客方法を云々す

ることも大切であるが、地域住民や行政に博物館の必要性を認識させるという視点からの研修会も博物館経営のために必要なのではないかということになった。そのため今回の研修会では「博物館はやっぱり学習施設なんだということ。そして学芸員は地域の教育者という意識を持つことが必要である。そのような観点から博物館活動をおこなうことにより、生涯学習機関の組織・施設として、地域にとって必要欠くべからざる存在なんだ。だから残そう」という機運が起こるのではないか。あるいは「そういう教育や学問を担う学芸員を採用しようという風潮になればいいのだけれども」ということで、今回のテーマの文言を決めた。そして発表者の人選もテーマに沿う人ということで協議した結果、博物館教育の理念的な面からの提起をしてもらうために大学で研究している人。学芸員になったばかりの人から悩みや矛盾などを抱えている人。酸いも甘いも知っていてなおかつ後継者を育てているベテラン学芸員であり館長。ということで探し回った結果、今回の3名の発表する方をそろえることができた。

また、せっかくの機会でもあったので、我々の職業の一端でも理解してもらえるように一般向けの開催案内のポスターを作成し、各教育委員会関係の施設に掲示してもらうことにした。

研修会の運営について

今回の研修会の運営にあたって心がけたのは、参加者の意見が出てくる研修会を運営するということだった。ともすれば基調講演で始まる講演会方式では、聞きっぱなしで終わるきらいがあり、参加者にとって博物館経営を考える上で発展性が乏しいように思えた。そのため今回の研修会では、通常なら講師という名称で紹介するところを提起者という名称で案内するとともに、研修会を二つにわけ、前半は提起ということで3名の方に発表をお願いした。後半では、前半の提起者の発表を受けてフォーラム・ディスカッションを行った。進行の上で注意したのは発表者との間の質疑応答

ではなく、参加者自ら提起に対して発言するといった討議の場を設けることだった。

研修会 1

研修会1は、一般の方も参加したなかで八雲町郷土資料館の三浦孝一学芸員の司会により3名の提起者が発表した。

最初の提起者は、北海道教育大学函館校の根本直樹助教授。『学習施設としての博物館の活動と運営について』というタイトルで、博物館経営の概念について大学人の立場から「博物館や大学関係の資料を読んでいて気付いたこととして、博物館の動向と大学の動向が、少し乱暴な言い方をすればほとんど同じような方向性で動いているということ、アメリカの影響を強く受けているとの印象を持っていること、さらに「教育と連携」が一つのキーワードとしてあげることができる」と話した。さらに今大学に求められているのはしっかりと「教育と地域貢献」であり、それは博物館にも求められているものであるということ」を提起した。

2人目の提起者は、檜山管内厚沢部町郷土資料館学芸員として昨年採用されたばかりの石井淳平学芸員から『博物館活動を始動したばかりの新任学芸員からの発信』というタイトルで「学芸員として配置されたが、実際の業務は、国指定史跡の整理であったこと。また、郷土資料館は20年前くらいに建てられていたが、専門職員も置かず、一部物置のような状態になっていた。そういうところに配置されていてどのように、博物館活動を行って行ったら良いのか」という切実な話を提起した。

最後にベテランの学芸員で館長でもある胆振管内白老町のアイヌ民族博物館の中村齋館長から『博物館のあるべき姿を構想しながら後継者の育成をはかる』(私の地域博物館経営) というタイトルで



提起する中村館長

「行政の勉強不足があるため、地域の博物館の課題として学芸員を置かないで博物館をつくってしまうという例や、学芸員を単なる行政のスタッフとしてしか見ない例などをあげて、おひぎ元の行

政に対して博物館の存在について教育普及していくことが必要であるということ。また、博物館は昔の田舎の学校のように郷土を離れて戻ってきた時に懐かしく訪れる場所であるように努力するべきである」と提起した。

研修会 2 (フォーラム・ディスカッション)

1部終了後、机の配置を口の字形に配置替えをし、佐野幸治市立函館博物館館長の進行のもと後半部のフォーラム・ディスカッションを行った。はじめての試みでもあり、進行にも参加者にも戸惑いがあったか、意見を言うべきところが館の事業の紹介であったり質疑応答的なところもあったが1部の提起に対して参加した人たちの意見を聞くことができたと考えている。ただ時間をもう少し確保しておくべきであった。また、全体の流れを想定して進行すればより充実した運営ができたのではないかと反省している。



フォーラム・ディスカッション光景
情報交流会と施設見学

研修会終了後、場所を今金町町民センターから郊外にあるクアプラザピリカに移し、温泉につかりながら夜が更けるまで情報交換が行われた。昼間の研修会とはまた違った、初心な人から中堅・老練までの人が集い、異年齢間の交流が図れたように見えた。また、今回は特別に日本ミュージアム・マネージメント学会を代表して幹事の原秀太郎氏も東京から参加し、北海道の博物館関係者同士の交流会におけるざっくばらんな雰囲気を感じていた。

翌日は当地の寺崎康史・宮本雅通学芸員の案内によってピリカ旧石器文化館、中里小学校(ピリカカイギウ)、地域特産品生産センターを見学した。

このたびのミュージアム・マネージメント研修会をつつがなく終えることができたのは、お招きした3名の提起者の方を始め、今金町教育委員会の皆様のご協力やそれぞれの館・園を代表して出席された皆様のおかげでした。この場を借りて感謝します。

(知内町郷土資料館学芸員 高橋豊彦)

道央ブロック
News

キーワードは、 北海道 博物館 道央ブロック

平成16年8月に石狩・後志・空知地区博物館等連絡協議会のホームページ「道央ミュージアムネット」を開設してから半年余りが過ぎました。アクセス数は今のところ330件（3月8日現在）ほどとスロースターターぎみですが、加盟55館園が一つのグループとしてホームページ上で形になることができました。今年に入ってからYAHOO!!の検索からも「北海道・博物館・道央ブロック」などをキーワードにヒットするようになり、これからに期待しているところです。

内容をご覧いただくのが一番なのですが、現在のところは各館園の基礎情報を一覧にした表が主となっています。これまで、石狩・後志・空知それぞれの管内の施設をまとめた形で紹介したものが少なく、旅行者や地域の学習者などにもご利用いただければと思っています。

また、年間4回発行しています会報誌「道央MUSEUMニュース」は、会員と他の協議会事務局に向けて発行してきましたが、第18号（平成

17年1月31日発行）からは「道央MUSEUMニュースweb版」として『道央ミュージアムネット』内でも配信しており、なかでも手刷りの会報誌では出来なかったカラー写真の掲載は、ものごとをよりリアルに紹介することとなりました。

これからは、このページの認知度を高めることと、なによりも会員間の情報交換の場として活用されることを望んでいます。そのためにも意見を出し合い、みんなで育てた私達のホームページでありたいと願っています。まずは、アクセスしてみてください。

道央ミュージアムネット



URLは、<http://www.iss-muse.net> です。

（道央ブロック事務局員・北海道開拓の村学芸員
黒川 郁）

道南ブロック
News

存在価値のアピール 田舎の町の学芸員

この町で「学芸員」という職種の存在を知っている人は、いったい何人いるのだろうか。私を採用した町当局でさえ、学芸員がどのような仕事をするのか把握していたとは言い難いということは赴任した後に気づいた。とはいえ、頼る知人もいないこの町で生活していくためには、現在の仕事を続けていかななくてはならない。厳しい財政状況の中、「無駄飯食い」といわれがちな学芸員という立場で仕事を続けるためには、自分の（学芸員の）存在価値をアピールし、町の人に理解してもらうことが必要だと考えた。

私は大学を卒業した平成9年に、札幌市にある発掘調査を行う財団法人に入社し、以来、7年間緊急発掘調査に従事してきた。学芸員の資格は所有していたものの、この間、学芸員的な仕事を体験することはなく、ひたすら発掘調査と報告書の作成に励んでいた。だから、私には学芸員的なセンスや教養が見事に欠落しており、平成15年に現在の職場に学芸員として勤務すると同時に、こ

れまでのツケを一気に払わされることになるのである。

自分の（学芸員の）存在価値をアピールしようと考えた私は、見よう見まねで「体験教室」や「学習講座」を実施した。「火おこし体験」は煙さえ出せない子供が続出し、「石器づくり体験」では、用意した数十枚の石器素材がたちまち石屑と化した。「学習講座」では私の専門である考古学の「入門教室」を開催したが、準備不足、実力不足が露呈する結末となり、実施後はしばしば自己嫌悪に陥った。

もっとも全ての試みが失敗したわけではなく、「遺跡探し」では新たな遺跡を発見し、中学校の「総合的な学習の時間」では、野焼きによる土器焼きが成功した。火おこしも今では十数秒で確実に着火できるようになり、日々、教材の改良に努めている。

学芸員になってしまった以上、センスや教養のなさを今さら嘆いても始まらない。多くの先輩方がそうしてきたように、足を止めず、日々進歩すべく努力を続けて行く以外に道はないのだろう。今年はどうやって存在価値をアピールしようか。

（厚沢部町郷土資料館 学芸員 石井淳平）

道北地区
News

下川町ふるさと交流館 展示改訂について

今年度下川町ふるさと交流館では平成3年7月の開館以来、初めての全面的な展示改訂を行いました。これまでに部分的な展示資料の変更は実施していましたが、展示資料全ての見直しと各種説明文等表記物の変更は初めてのことで、関係機関や研究者の協力や指導のもと完成することができました。

今回の展示改訂の背景には開館以来、町民等から多くの郷土資料が寄贈されていること、開館後の調査研究が進んだ地質・植物化石・考古学等の



学術資料など新しい分野の資料が増加したことなどを展示に反映する必要がありました。

展示方法として留意した点には、まず今後の展示替えがしやすいように、天井近くまで壁面メッシュパネル、大型ステージなど什器類を大型化し分野別に数多く展示できるようにしたこと、次に表記パネル類を差し替え可能な挟み込み型にして説明文等の変更を施設のPC等で作成できるようにしたこと、次に見学者が民具や岩石などの資料を「触る」「使用する」など体験できる展示コーナーを設置し、資料理解をやすくしたことです。

ふるさと交流館のリニューアルした展示を是非ごらんください。

(下川町ふるさと交流館 学芸員 今井真司)

日胆地区
News

来年度の「道博協ミュージアム・ マネージメント研修会」を主催 日胆地区博物館等連絡協議会

平成16年度の当ブロックの研修会は、10月19日から20日にかけて、「アイヌ文化資料の活用と郷土学習への対応～お互いが満足できる事業・授業とは～」をテーマに、静内町郷土館、町教委、町郷土館友の会しずない歴史倶楽部の協力をもって「桜舞町」静内で開催されました。まず、同町郷土史研究会山田一孝氏会長により、今話題の「北の零年」製作にかかる苦労話『映画製作に見る資料提供』を聞き、その後研究協議として、静内町立高静小学校中館吉達教頭に問題提起を、白老町教育委員会安藤尚志指導主幹と平取町立二風谷アイヌ文化博物館吉原秀喜学芸主幹、新冠町郷土資料館新川剛生学芸員にそれぞれ実践発表をいただきました。夜の情報交換会では、しずない歴史倶楽部や仙台藩白老元陣屋資料館友の会会員の方々も交え、恒例となりつつある“自炊”を静内ふれあいセンター御園館で行いながら、参加した20人の話し声は、夜が更けるまで聞こえていました。

翌日は野外演習として、映画の舞台となったロケ地を精力的に廻りました。

また2月22日には、苫小牧市博物館を会場に臨時拡大委員会が行われ、17年度の道博協ミュージアム・マネージメント研修会のテーマを「博物館来館者増対策～人はなぜ博物館に来ないのか～」とし、9月1日・2日の両日、“歴史と文化の町”白老で開催すべく、これを主催することを確認、今後細やかな調整に入ります。お楽しみに。

なお、17年度総会は6月6日・7日、虻田町で行う予定です。

(日胆博連協事務局 白老元陣屋資料館 武永真)





道東3管内博物館施設等連絡協議会 博物館交流推進会議報告

平成16年度の道東3管内博物館施設等連絡協議会の「博物館交流推進会議～自然再生と博物館の役割～」が、10月20・21日、標茶町の「憩いの家かや沼」で開催されました。11施設から21名の参加を得ました。

平成14年に自然再生推進法が成立しましたが博物館施設は、元来、自然の調査研究、保護保全の役割を担うべき機関であり、ICOM（国際博物館会議）では博物館の事業目的の一つとして自然環境保存を位置づけていることから、今回の研修会のテーマが決まりました。

環境省東北北海道自然保護事務所の中野自然再生専門官による基調講演「釧路湿原の自然再生事業」では、保全・回復・復元・修復・維持管理・創出といった様々な「自然再生」のあり方が紹介されました。

事例発表では、「十勝における自然再生にかかわる動向と自然史博物館の使命」（上士幌町ひがし大雪博物館：川辺氏）、「自然再生とコウモリの生息」

（根室市歴史と自然の資料館：近藤氏）、「地域学習と自然再生」（標茶町郷土館：坪岡氏）について発表がありました。

川辺氏からは、自然再生における博物館の使命として、「地域の生態系および自然史の調査研究」、「自然環境保全のための情報の提供と教育啓発」、「修復活動をする住民への支援」、「学芸員の使命」をあげ、学芸員は地域の数少ない専門家として積極的に取り組むべきとの報告がありました。

近藤氏からは、道東には13種類のコウモリが生息し、蛾の捕食などの面で農林害虫の駆除に大きな役割を果たすなど、生態系において重要な位置を占めており、コウモリの繁殖・冬眠・採餌のための場所を確保する必要からも、生息調査を進めているとの報告がありました。

坪岡氏からは、標茶町郷土館で行っている環境教育として、「絶滅に瀕している動植物の生態、生育調査と保存に向けての取り組み」、「アオサギコロニーの継続調査と自然観察での周知」、「学校の総合的な学習中における環境教育」、「学習相談のなかで、自然環境への呼びかけ」について報告がありました。

（釧路市立博物館 学芸主幹 橋本正雄）

研修会は9時から15時までと時間が決まっていたので、一連の手順の指導を受けるのみだったが、展示資料としての標本を作成する際には、標本対象にサイズを合わせたガラスの切断、正確な研磨が必要など、さらに時間と神経をつかって作成することとである。今後、導入の際に必要な道具の選び方、入手方法のアドバイスも併せて行われた。

作業の始めに封入したアクリル樹脂は、乾いていないので各自持ち帰り後日各々で磨くこととして研修は終了した。

（紋別市立博物館 学芸員 秋山朋子）



型にアクリル樹脂を流しこむようす



網走管内博物館連絡協議会 平成16年度個別研修会(美幌)

平成16年11月5日、網走管内博物館連絡協議会個別研修会は、16名が参加。美幌博物館の鬼丸学芸員指導の元、アクリル樹脂による標本作りの実習を行った。

本研修会の目的は「学芸員の専門業務として最近注目されている『ハンズ・オン』教材（展示物）による『アクリル樹脂封入標本』づくりの方法を習得し、網走管内博物館職員の研修を深めると共に生涯学習における博物館機能の向上を図る」であり、触れることが困難な破損しやすい資料や汚れに弱い資料なども間近に観察することができ、展示やイベントにも多様な使用方法が期待できる、将来性のある展示方法である。

アクリル樹脂は、型に樹脂液を流しこんでから乾燥するまで1週間かかるため、実演の手順として、まずアクリル樹脂を調合し、型に樹脂を流し込んだものをつくり、次に美幌博物館側で用意された既に乾燥して固まったアクリル樹脂標本を磨き上げ、一連の作業を体験した。

学芸職員部会
News

「地域学知床 学芸職員部会研修会・ 斜里開催に向けて」

平成17年度学芸職員研修会

2003年1月世界自然遺産候補地として「知床」が推薦されて以来、再び「知床」に注目が集まっている。知床をテーマにした特集番組や記事が流れ、シンポジウムや講演会が毎月のように開催されている。

世界遺産推薦を期にテレビ、新聞などマスコミ関係者から、各省庁、北海道など行政機関、大学など研究機関にいたるまで、皆がこの知床という一地域をテーマに、「何か」をしたいと考えている。

「知床はどんなところ？ 自然、歴史は、他の地域にない特徴は？」他社、他機関にない新たな視点で知床にアプローチできないか、皆が考え、ネタさがしをしている。

そして博物館にもさまざまなところから相談や問い合わせが殺到している。ここで学芸員がそれらの期待に答えなければならない。世間の注目が集まっている今こそ、我々が地道に積み重ねて蓄

えてきたものを吐き出していかねばならない。

まさにこれは地域学であり、知床という地域をさまざまな視点から、もう一度見つめ直すよい機会である。このような機会を与えられた我々は恵まれているのかもしれない。知床は過去にも幾度かこのようなチャンスがあり、そのたびに成長してきたのではないか。

とはいうものの、「知床」は知床博物館の学芸員だけで手に負えるものではありません。これまでも多くの皆さんに関わっていただいていたからこそ、今があるのだと思います。今回の研修会をきっかけに、多くの学芸員の方にさまざまな角度から「知床」にあらためて関わっていただき、新たな「知床」を共に見つけだしていければと考えています。

知床と各分野の研究者をつなぐ、つなぎ手となることができればと考えています。

「知床」は久しぶりという方はもう一度、初めてという方はぜひこの機会に、お待ちしております！

開催日は今のところ8月20～31日の間（最有力8月25・26日）を予定しています。

（学芸職員部会 知床博物館学芸員 増田 泰）

動物園・水族館
News

夏休み特別展

日本は今エイリアンをどうするかでもめている。追い出すのか、守るのか…。ブラックバスを日本の生態系から排除するのか、しないのか…。Alien speciesとは、アライグマ、マングース、ミンク、アメリカザリガニ、セイヨウタンポポ…。つまり人が持ち込んだ外来生物のことだ。

旭川市旭山動物園では、教育啓発を目的として例年2回、鳴く虫、甲虫、野鳥、狂犬病などのテーマで企画展を開催しているが、2002年から年1回は外来動物を取り上げ、今後も継続していく。

外来動物問題とは、それだけ世論が真剣に考えるべき生態系の危機と感じている。ブラックバスがアユやモロコ、アライグマが野鳥やニホンザリガニを食い荒らし、また漁業や農林業に被害をもたらして人間社会との摩擦を起こしていることは放置しておける問題ではない。命の重みは同じと言うけれど、先祖から受け継いだ生態系を手つかずに残していくためには、人間が持ち込んだ外来動物は今すぐ速やかに排除するしかない。

今回の外来動物展では、道内で現在進行形の外来動物問題、アライグマ、ブラックバスや鳥インフルエンザなどの感染症について、さらに最新情報をアップデートし、実物展示を行う。さらに、旭川と遠く離れた沖縄やんばるの森で起こっている「マングースがヤンバルクイナを滅ぼす！」外来動物問題とヤンバルクイナを守る地元住民の挑戦について紹介する。



2004年度外来動物の現状展

ペットや産業のため飼っていた動物を捨てたり、逃がしたり…。外来動物に罪はないが、在来の野生動物やそれを産業として生活している人にも罪はない。どちらを守るか…。残された時間はない。

（旭山動物園 飼育展示係獣医師 福井大祐）

北海道大学総合博物館

北海道大学博物館の歴史は札幌農学校時代の明治17年に開拓使より博物館を譲り受けたことに始まります。この博物館は現在でも北大の北方生物圏フィールド科学センター植物園博物館として活動し一般公開されています。また、これとは別に、札幌農学校開校以来蓄積されてきた400万点を超える学術標本を、より適切に保管する必要性が高まり、新しい大学博物館設置の検討が始まりました。

1999年に北海道大学総合博物館として設置が認められ、2001年の大学創基125周年を機に、第1期工事として3000㎡の改修がされ、一般公開展示が始まりました。引き続き第2、3期工事の残り6000㎡の改修工事が構想されておりましたが、財政等事情もありストップしています。つまり一部開館しましたがまだ完成していない博物館と言えます。

現在教員スタッフは7名で、そのうち1名は函館キャンパスに在中。生物系が4名、地学系が2名、考古系が1名というスタッフですので、全体としては自然史系の総合博物館と言えます。

北大総合博物館の使命・役割として設立当初に挙げられたのは以下の4項目ですが、現在の自己評価とともに紹介しましょう。

1) 大学改革の推進

インターファカルティの核、総合的研究教育の企画・推進、実践的体験教育が謳われています。これらは学内での役割と言えるでしょうが、まだまだ努力不足といったところでしょう。それでも大学全学教育においては、標本・資料を重視した一般教育演習や複合科目を計4つ持っていますし、学芸員実習も受け入れていますので、基本的な役割を果たしていると言えるでしょう。

2) 先導的・先端的学術研究の基盤整備

新たな研究体制の場・契機、国際学術情報交流センターなどが挙がっています。現在北大で採用されている21世紀COE「新・自然史科学創成」では、地学系と生物系との融合を図る研究プロジェクトが進展中です。そこでは総合博物館が中核的な場として位置付けられていますので、今後の進展が期待されるところです。

3) 自然・文化の保存・伝承

新しい「博物館学」を確立・構築、北方圏の重要性を再認識するプロジェクト企画・立案が挙げられています。来年度から開校予定の大学院共通授業、博物館学特別授業「学術標本・資料学」はより専門的な学芸員育成を目指すものです。北方圏関連のプロジェクトは、個々の教員レベルでは行われているものの、博物館全体としての企画・立案にまでは至っていません。今後の課題である。

4) 開かれた大学の実現

リフレッシュ教育・生涯学習の推進、体験学習センター。これについては期待以上の成果を挙げているとよいでしょう。2001年5月に始めた総合博物館セミナーは2005年2月17日で87回となりました。毎回聴講される常連も増えてきました。企画展示も2002年5月の第1回から数えて、2005年2月には第19回目を開きました。

このように、設立当時に掲げられた使命・役割と比較してみると、「大学の窓」としての機能は果たしつつあると言えますが、より本質的な部分での力は残念ながらまだついていないというのが自己評価です。大学の現役教員は専門分野での研究教育はできますが、さらに大学博物館として発展するためには、学術情報に関する基盤整備や展示・企画を含む博物館マネジメントの専門家、初等・中等教育専門家などのスタッフ充実が求められるところです。

(北海道大学総合博物館 教授 高橋英樹)



〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

TEL (011) 706-2658, 3607

<http://www.museum.hokudai.ac.jp/>

休館日 毎月曜日（月曜が祝日の場合はその翌日が休館日）、年末年始（12/29～1/3）。この他、大学行事等で臨時開館・休館の場合があります。

開館時間 夏期（6～10月）9:30-16:30

冬期（11～5月）10:00-16:00

入館料 無料

事務局日誌

平成16年

- 10月7日・第2回役員会開催(今金町)
- 10月7日・ミュージアムマネジメント研修会(今金町、8日まで)
- 11月2日・平成17年度北海道博物館協会表彰申請関係書類を会員各館へ発送
- 11月2日・第43回北海道博物館大会報告書の配布を周知
- 11月4日・「平成16年度北海道博物館協会加盟館園等現況」作成のための調査票を配布
- 11月11日・羽幌町海鳥センターより表彰候補者の申請
- 11月18日・釧路市青少年科学館、閉館により退会通知(団体会員)
- 11月25日・網走管内博物館連絡協議会へ交付金を送付
- 12月1日・函館市より、町村合併に伴い・恵山町・南茅部町・椴法華村の施設の退会通知
- 12月15日・北海道博物館協会学芸職員部会へ補助金送付
- 12月15日・日本動物園・水族館協会北海道ブロックへ補助金送付
- 12月20日・浦河町立郷土博物館より表彰候補者の申請
- 12月21日・神田日勝記念館より表彰候補者の申請
- 12月22日・足寄動物化石博物館より表彰候補者の申請

平成17年

- 1月7日・留萌市海のふるさと館・北海道開拓記念館より共同で表彰候補者の申請
- 1月27日・神恵内村郷土資料館より年度末を以て退会との通知(団体会員)
- 1月28日・江別市セラミックアートセンターより年度末を以て退会との通知(団体会員)
- 1月31日・羽幌町郷土資料館より年度末を以て退会との通知(団体会員)
- 2月4日・日本博物館協会へ平成16年度支部助成金を請求
- 2月8日・松前町郷土資料館より年度末を以て退会との通知(団体会員)
- 2月16日・平成17年度北海道博物館協会表彰候補者関係書類を表彰担当役員に発送
- 2月17日・道東3管内博物館施設等連絡協議会および道北地区博物館等連絡協議会へ交付金を送付
- 2月18日・「平成16年度北海道博物館協会加盟館園等現況」を発注
- 2月22日・「道博協ニュース」第83号の原稿執筆を依頼
- 2月22日・平成16年度第3回役員会の開催通知を発送
- 3月8日・平成17年度北海道博物館協会表彰候補者の協議結果を表彰担当役員に確認(全員異

議なし)

- 3月17日・道南ブロック博物館施設等連絡協議会へ交付金、北海道美術館学芸員研究協議会および北海道青少年科学館連絡協議会へ補助金を送付
- 3月24日・平成16年度第3回役員会を開催(KKR札幌)
- 3月 日・平成16年度北海道加盟館園等現況、平成17年度各館園行事等調査、第83号道博協ニュースを発送
- 3月26日・第3回役員会開催(札幌市)

新入会員・退会会員

平成16年度次の会員が入会されました。
団体会員 北海道大学総合博物館(札幌市)

平成16年度次の会員が退会されました。
団体会員 恵山町郷土博物館・椴法華村灯台ファミリー博物館・南茅部町教育委員会・釧路市青少年科学館・羽幌町郷土資料館・神恵内村郷土資料館・江別市セラミックアートセンター・松前町郷土資料館
個人会員 片桐宏理氏・福岡イト子氏

事務局からのお知らせ

平成17年度北海道博物館大会は平成17年6月30日、7月1日の両日、小樽市の小樽グランドホテルを会場として開催することになりました。大会テーマ、シンポジウム等につきましては只今検討中ですが、詳しくは「道博協ニュース」第84号でお知らせします。数多くの参加をお願いいたします。

会費納入のお願い

多くの会員からは平成16年度の会費を納入していただいております。しかし、平成15年度及び平成16年度の会費をまだ納入されていない会員がおります。北海道博物館協会の事業は会員から納入されます会費で運営しておりますので速やかな納入をお願いいたします。

主な展示会及び普及事業に関する調査についての協力をお願い

平成17年度の各館・園の主な展示会と普及事業に関する調査を行います。各館・園に調査票をお送りいたしますので、皆さまのご協力をお願いいたします。